英語表現Ⅰにおける英語の多様性への理解を深める取組
―スキット発表を活用した授業実践―

外国語（英語）　平　田　智　子

1. はじめに

日本の中高の英語教育ではアメリカ英語が主流であるが，グローバルな社会を生きる生徒たちは，将来アメリカ以外の様々な国や地域で使われる英語，また非母語話者が使う英語にも多く出会うことになる。昨年度より導入の共通テストでもイギリス英語が出題され，また様々な accent（なまり）のリスニング音声も出てきた。このような多様性に対応するために，この授業では，多様な英語に触れる機会を与えることで，将来生徒たちが様々なバックグラウンドを持つ人々と臆することなく英語を使ってコミュニケーションすることができるように，また相手との相互理解をより深められるようになる一歩となることをねらいとしている。

2. 授業内容

本取組は，英語表現Ⅰにおいて，全6回の ALT との TT で行なった授業である。

最初の2時間では，スキット活動に至るまでの前段階として，自作のワークシートを用いた。まず，ペアで「アメリカとイギリスで，同じ単語が別の意味になるものを挙げる」というブレインストーミングを行ない，米国と英国の英語の違いを意識させる。その後,学んだ意味の違いを会話形式にして,英語で説明するという活動を入れた。次に，リスニング活動として，同じシチュエーションの，米・英・豪の英語の3つの動画を見せ，どの国の英語かを推測させ，その後それぞれの会話を穴埋めディクテーションさせた。その後，3ヶ国の会話文を違いや発音を意識させながらペアで音読練習し，数ペアを当ててクラスメートの前で音読を発表させた。この段階で，ある程度の「違い・多様性」に慣れさせ，スキット作成への準備・心構えをさせることができる。

次の2時間で,スキット作成と練習を行なった。生徒たちは,英語が話されている国・地域を一つ選び，前述の動画の会話を基にして話を膨らませオリジナル会話を作成した。この活動では，英語が母語や公用語である国や地域から自由に選ばせることにより，興味を持った国・地域の英語を進んで調べるという主体性が育まれ，ペアで話し合いをしながら現地の英語の特徴を探しそれを効果的に会話に取り入れていくということで，活動を楽しみながら，英語の違いを受け入れる寛容な姿勢を育むことにつながっていく。

最後の2時間分でスキット発表を行なった。場面は,「日本から引っ越してきた人が現地に住む隣人と初めて交わす会話」で，双方に地元のお土産を渡し合うという設定だ。どのペアも人物設定やストーリー構成，お土産選び，演技など創意工夫に富んでおり，全部で15の国と地域が登場した。教師は各ペアの発表が終わるごとにその

local English を黒板に書き出し，聞き手の生徒と共有した。

評価に関しては，筆者と ALT およびオーディエンスの生徒は評価シートを持っており，5 つの観点（内容，長さ（1 分半以内），発音，ジェスチャー＆アイコンタクト，完成度＆流暢さ）でそれぞれ 5 点，合計 25 点満点で評価し，パフォーマンステストとして科目の評価に入れた。ほぼ全てのペアがきちんとセリフを覚え，現地の発音・なまりを意識しながら発音をした者もいた。ストーリーが面白い発表が多く，聞き手の笑いを誘っていた。

3. おわりに

この授業は，自分やクラスメイトの発表を通して生徒たちに様々な英語を授業内で「擬似体験」させることができ，その体験によって生徒は楽しみながら英語の多様性を学び, より理解を深めることにつながったと感じている。授業後のアンケートでは,「それぞれの多様性を認め，知ろうとする姿勢が大切であると思った。」や,「互いに配慮して，相手の国や地域の言葉を尊重し合い学んだりすることが大切だと考えた。」,「自ら進んで様々な英語を学ぶことはとても重要だと考えた」などの記述があり，生徒の理解が深まっていることを感じた。